

和紙川書志

和書門			
二	九	〇	〇
〇	三	函	號
六	冊	架	類

內閣文庫			
三	九	〇	〇
〇	三	函	號
六	冊	架	類

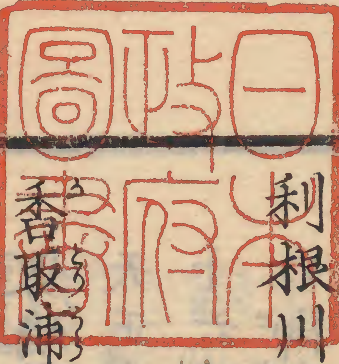
內閣文庫	
番號	和 22900
冊數	6 (6)
函號	174 117



利根川圖志卷六

明治十二年購求

下總 布川 赤松宗且 義知 著



香取浦

香取志云此の海西の方ハ利根川ハ續キ東ハ銚子ハ至

る事十里餘北の方ハ潮來ハ至リて一里餘乾ハ霞ガ浦ハ往

死て是マコト十里餘良鹿嶋息栖ハ往ル夏三里ハかくのむと

大河たるを以て古一ハあり渡リ難キ浦とモ故ハ香取の浦同

トク海又沖あど一詠る古歌多くあり先海と詠るハ万葉集ハ

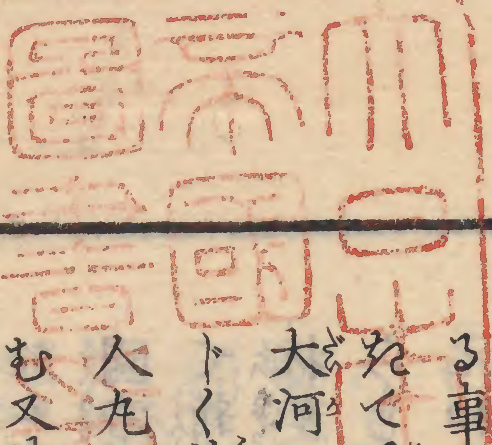
人丸 大船の香取の海ハ愠ハろ一如何ある人ハ物思ハざら

む又浦と詠るハ續千載集ハ定家 夏衣香取の浦の假寐ハ浪

のよるく通ハ秋風まハ沖と詠るハ家集家隆 今日よりハ幣

帛取祭ハ船人の香取の沖ハ風向ハ別リ此外諸書ハ多くあり

十六嶋 本名新嶋とリハ香取浦洋中ハあり香取志云斯て數百



の星霜を經るましく洋中自づら洲出來年を積て稍大さ也
爰小天正十八年水陸田を開き始め上島まづ成就を石田主馬
亮といへる者吉田左太郎ふ就て 東照神君ふ言上を神君
にこゝめされ吾治國の始め新嶋を開くものと願ふ所あり平相
國清盛自己の功を以て兵庫の築島を立らる今家康が徳ふ曰
て新島おのづから出來を喜悅の至りと仰らる八筋川西代ト
抗班田成就一同十九年大久保重兵衛ふ仰せて夫役を許さる
らる繻符を賜つる慶長十年長嶋出來同十九年六角をむらさ
元和三年石納飯嶋寛永元年大嶋を開き同三年嘉藤洲同五年
堀嶋同七年結佐同八年中洲同十五年磯山扇島ふれり然るに
天正十八年より寛永十五年ふ至るまで三代五十三年ふいて
十六嶋班田の功成就をひきを新嶋といふ此島残らば 國初
の御先蹤ふ隨ひ後御兩代も同トく繻符を賜つる云

上の嶋結佐六角松崎西代中嶋志の六ヶ村を上新嶋と唱へ八
筋川ト抗大嶋三嶋堀嶋扇嶋加藤洲磯山中洲長嶋此十ヶ村を
下新嶋と唱へとも小佐原組津宮篠原大倉岩崎の新田石余を
一耕地入會とありて是を新島料と唱ふと云
。あうん堂 八筋川ふあり十一面觀世音を安置を例年七月十
八日相撲あり御堂惣赤ぬりある由也
。薬師如來 大嶋ふありとら八當島を開草老とる黒田玄蕃亮則
利が守本尊也といひ傳ふ諺ふ云新嶋起立の頃黒田則利と常
洲行方郡大臺六ヶ村堀より十五の城主小貫大藏の高九万石餘行方
と家老と常陸下総の堺目争論ふ及び互ふ船中あてアカトリを
以て泥を打合之斗也又水をアカといふハ梵語あり 志が
其日ハ双方相引ふあり翌日互ふ軍艦を催し牛堀前ふおいて
合戦を然る小小貫ハ飛道具を以て打立々をハ黒田勢大いふ

敗北してきて小急難のがもかしく覚りて黒田への薬師如
來を一信の祈念せし不思儀ある哉暴風頻に吹起り荒波歌
船を顛倒を其際小黒田勢ハ霞ヶ浦めうざの鼻をて逃のび難
あく引取らるるや是をせふとるお合戦といふ後ハ公の御沙汰に任とせ
加藤洲十二の橋ハ川の両邊小民家ありて家おとの通行橋也
中ハ板を橋板有てもとより十二あるが時として十三ふ成夏
せバ又一橋闕る去と極めて出來るとあり

子育觀世音加藤洲長泉院境内小ありおの寺より御夢相みて
小兒五疳驚風の薬を出をせふかとうず薬といふ

牛堀 霞ヶ浦入口あり霞ヶ浦へ至て渡り難き海をせバ此所ハ
滞船して風をまつ故小出入の船多く此河岸小集りま鹿嶋
小至る小利根川より横利根小入り北利根川を経て浪逆の海
にいくる鹿島道記小仙臺霞の浦志田の浮嶋ふどい一るとこ

ろ船のうちより見己ささるま右のりさそるう小筑波山こ
のも彼面の峯も見えさり漕行船の追手おれバ見るがうち小
むう山々も跡ふありて々小やあるさ詩小汲水疑山動揚帆
覽岸行といへるもされがら目前の景氣おあひひやらるる海
濱小海人の家居ありて前の杭小繩をうけ不し磯邊小小舟引
きて物さむとる住居のさほがふよく繪おも似たりなりと船
をさふつらほえつきて見おこれも跡小成ぬ昼つうと風を
おしむらひてうちくもり夕立一とやり志ておそくに船のう
ちささるる岸小船をよせて風のうらるをまあたるお雨おど
ろ小降ささりされバ笠引お不ふほど心もいとむづう一半時
斗して雨風やま名残の雲も晴ささりて空も見るがうちおさ
よらう小日影の見えたる小岸の芦の葉おかくせる露をむら
くと風の吹みおささま涼ささいやまさりぬ爰小船うけたる

ほしめてとり子やう此ものとりむらき人々おもはれし免とづ
うらも志たしめて時うつり侍ればやうく日もかこふれぬさ
らバとて漕出^こ一行^い小潮^こ來のむらむらあさりて香取^か明神^{めいじん}入海^{いりうみ}
をへごて神々しく志ありあむる木の間より玉垣^{たまがき}の見
え侍るいとさふとくをがまれさせ給ふ海よりうちいる塩^{しほ}と
水とのみかとなきバ浪たうく船志づりあらばされども所^{ところ}の
もれども引船^{ひぶね}多く出して細^こ洗^{せん}あて先^{さき}ぶち引なきバ日高^{ひたか}か
も小岸^{こがし}小船^{こぶね}着^つり來^きう祓^{はら}てハ暮^{くれ}て此磯^{いそ}ふハつくべうりたり
と船のうち此者共^{ものども}いひあへりなきども今朝^{けさ}より此追手^{おいて}の
風^{かぜ}ふさそハれ漕^ことも覺^{おぼ}えばそり行^ゆるも急^{いそ}申^{まを}刺^ささくる不
どうやとおやも船よりあがりておもふらふ入侍^{いりざむらい}りなれば
あるトの出^{いで}あひてもてれいふ斗^とあし此宿^{しゆく}のあるトハこれ
みちかえふたもれなればこきて心ふりりあり參議^{さんぎ}源宗^{げんすけ}

堯^{えん}卿^{きやう}水^{みづ}御使^{ごし}たまりりくごものふど送り給ふ此君^{きみ}も二日三日
のうち常陸^{ひさかた}は國^{くに}ふ下^{くだ}りなよべき沙汰^{さた}あり爰^{こゝ}もかの領^{りやう}するふ
所^{ところ}あれバ何^{なに}くもと驛路^{えきじよ}の人馬^{にま}おろく出^{いで}て旅^{りよ}の舎^やりれこや
まで御^ごらう後^ごふうけ武藏^{むさし}野^のより先^{さき}ごらひしをらせ給ふこぎ
みうち此^こ人^{ひと}々^々こきくそれさごせり云^い
同安^{どうあん}永道^{えいどう}の記^きふ香取^かの浦^{うら}小船^{こぶね}よするも浪^{なみ}ハ志^{こゝろ}づらあれど風
むらひて船^{ふね}おそく日^ひも暮^{くれ}あんと船子^{ふねこ}どもいつきバゆる遠^{とほ}
く見^みゆる森^{もり}の木立^{きだち}そのうさときこゆれを遙^{とほ}ふをがそぬらづ
さし浦^{うら}あまの立^たちもさる祓^{はら}む
音^ねふのこ聞^きておごる夏^{なつ}衣^ぎかどりの浦^{うら}ふよゆる夕^{ゆふ}あそ
銚子^{しやうし}といふ湊^{みなと}より入^いる小船^{こぶね}らも追手^{おいて}なれば此浦^{ここのうら}ふ着^つるこ
て帆柱^{ふねしら}のそたてしはあがる船^{ふね}あまし見^みゆる是^{こゝ}れ是^{こゝ}れ香取^かの浦^{うら}と
いふ

帆柱ぞみをけくしれる大船のかとりの浦の見るめから浦
どかくてゆるく川岸の田面を越て霞の浦見ゆるもたるき
若ら浪の高く打よる浦のあがめ折ら夕附日かやさあ
ひて船中第一佳景あり

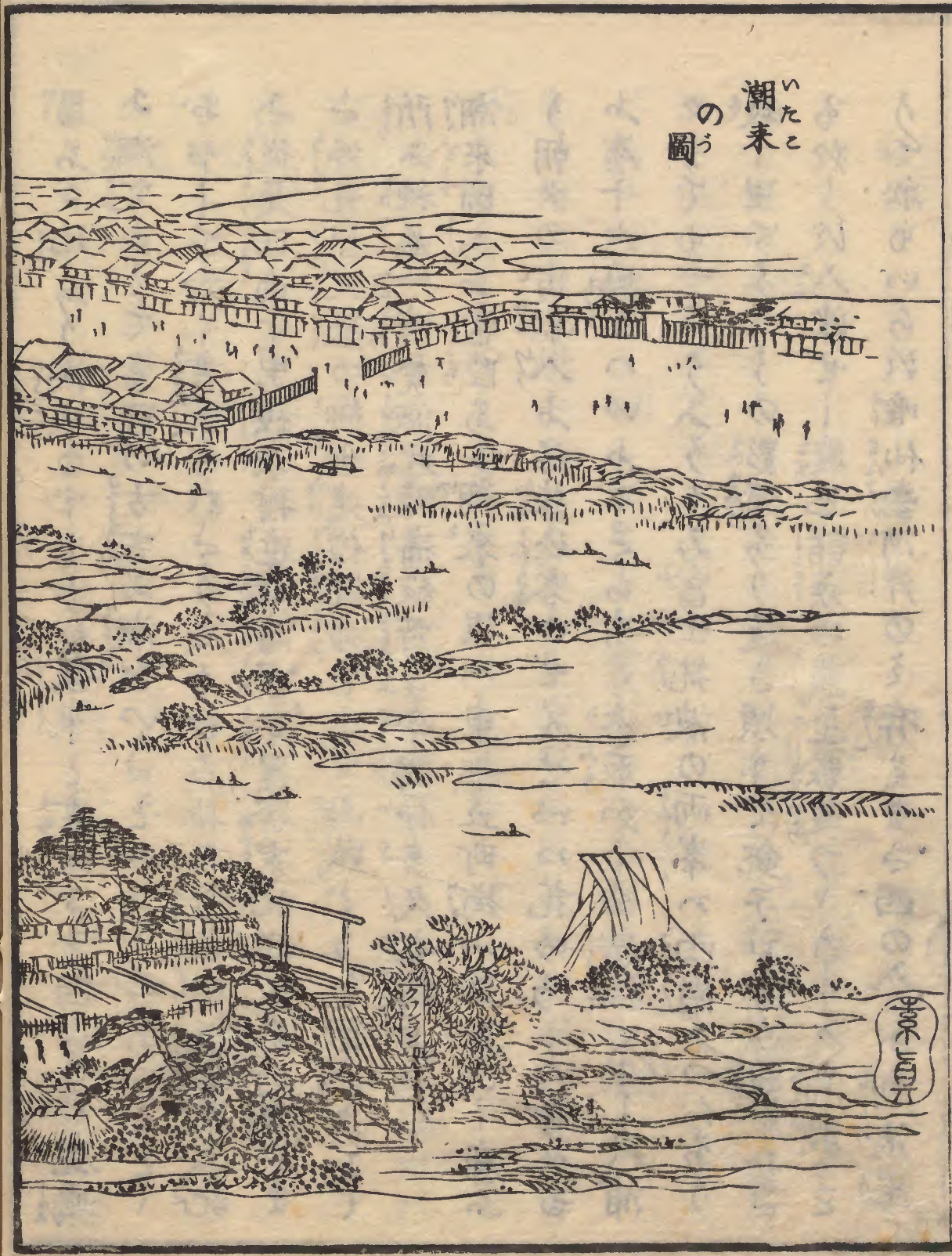
入日影色とる雲ふ立ちゆる霞れうらの水は若ら浪
ま信田の浮嶋みどりもさく浦のあれさ木ざち一まぢ
引こさるやうふ見ゆるいふもえあらば

浦の名れくすも夏ふとよとや見ゆるめさどらぬ信田れ
浮嶋筑波山遠うら糸ども雲立ちめて見え日くれぬれ河
岸み螢のみごも飛あまこ見ゆるもさくたもれうら夜く
く更あむ事ふ心おちぬ糸バ歌よまばいそぎの潮來の河岸
ふ船をつらぬ歌あめくあきと一首づつを

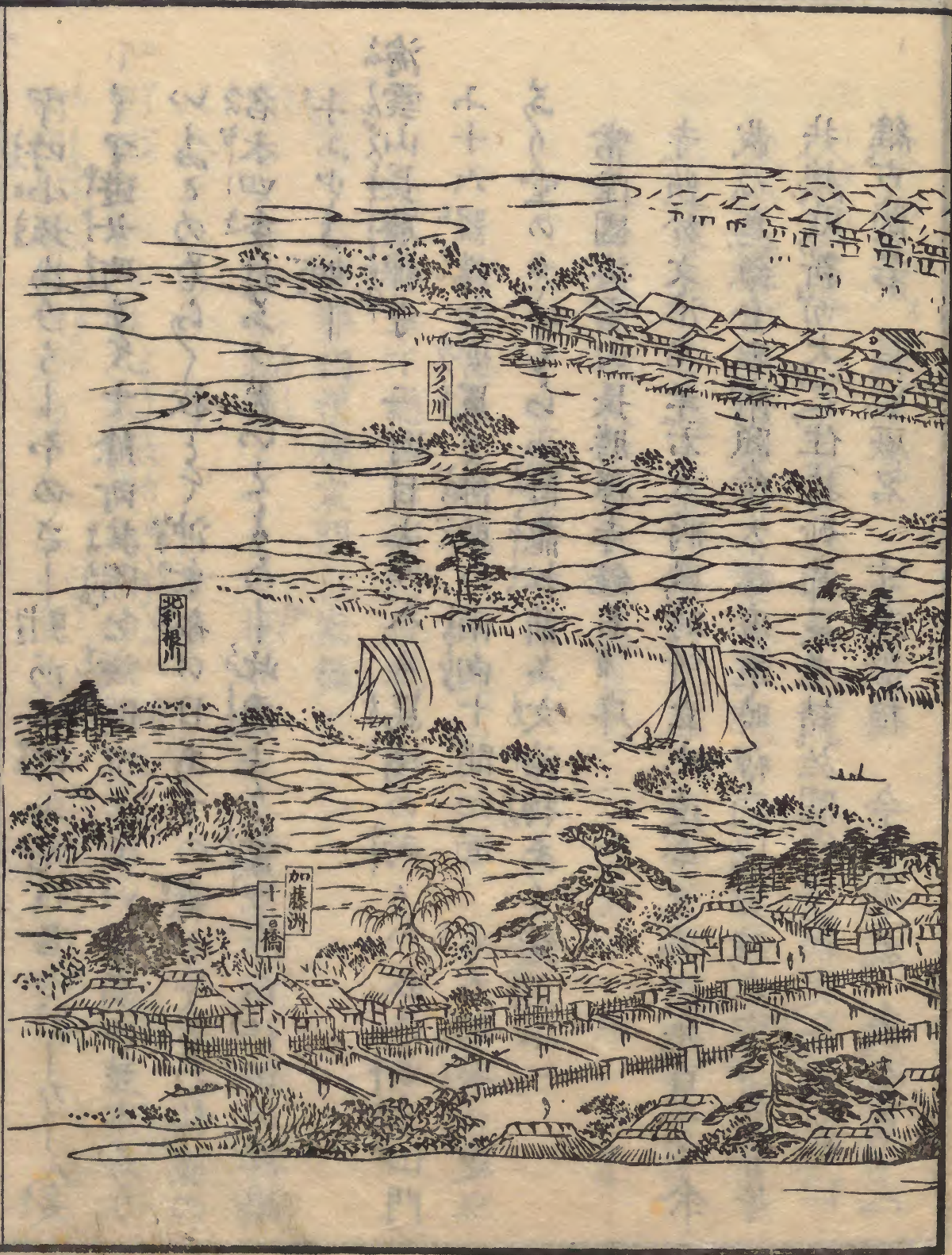
潮來 鹿嶋志云鹿嶋より西二里行方郡ふて濠肆有ていと繁

昌ある地あり潮來の字もとい板來と書くるを西山の君鹿嶋
ふ潮宮ありて常陸の方言ふ潮をいことい興あることく
おぼしてかく書改られりとう和名抄ふ行方郡板來風土記
ふ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之驛云ま
ふ淨見原天皇の御世建借間命をして凶賊どもを撃亡さる
所ふ種属一時焚滅此時痛殺所言今謂伊多久之郷云
潮來圖志云常陸ある潮來の里へ東都五町街ふらひ一廓ふ
り朝夕の出船入ふ糸落込客のせんせいの花の河一た雪のゆ
ふ登十六嶋々のいふもさるあり香取かへ息柵てうこれ浦
々まで一まうふろみ富士筑波の両峯へ西南ふつらあり
数十里てうまうの影境あり近き頃まで銚子口より親船むき
もたへ入津せ一處也諸侯の藏屋敷建つゞき一ヶ瀬瀨うこ
りて船もいらは唯仙臺河岸のそ存さま西の入口ふ潮浪里

いたこ
潮来の
の
う
圖



三



加藤洲
十二橋

川北

七

や呼小坂ありうーのさー引ゆる故ふ充ハ名つけーかゝん爰
々遊女町ま々十餘町其間を淺間下とていや高さ並木あり
いふこのをわらへ松とて沖乘船の目あての森とて春ハ梅藤の
名木四季北あが光いとよろー此處より霞がうら信田の浮嶋
手ふゆる如ー

海雲山長勝禪寺 二町目より入る馬場の西りの松の並木山門
ふ十六羅漢を安置を佛殿ハ南向十間四面 右大將殿の建立
あり堂のうごころふ卧龍松前ふ文治梅あり鐘名ふ

常陸國海雲山長勝禪寺鐘名有序
寺始於文治元年右木將殿時所立也迨今元徳庚午百二十余
載乃爲鎌倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏与貴眷等
共施賤新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟爲之銘曰
維古蘭若 長勝厥名 寸筵微撞 今畧未宏 爰命鳧氏

鎔範速成 鏗々音々 殷雷吼鯨 音聞佛事 関聾啓音

大哉圓通 十虛廓清 霜天月曉 落景初更 真機普發

衆夢齊驚 深禪偃仰 苦趣休停 客船夜泊 常陸蘇城

上延睿箕 下息戈兵 檀門茂盛 梵刹堅貞 海雲日橫

青山崢嶸 个天號令 相道通亨 元徳庚午十月一日書

大工甲斐權守 助光

住持傳法沙門 妙節

大施主下總五郎禪門道曉

大檀那相模禪定門 崇鑑

斯ある一より此鐘とごりふ撞事をゆるさび又時の鐘ハ本坊
此入口ふあり

小里姫の塚 同大衆院淡島明神の地内あり小里姫ハ島崎左
衛門尉殿此姫君あり今ふ小里とつふ古跡の地名あり

潮來竹枝詞

詩佛老人

思似月明復水清隨郎行處逐郎行
談從十二橋頭望何水竹橋
無月明

泊碧欄舍

鵬齋老人

家々面水領秋色明月湧時流
更輝漁唱一聲何處子潮來風起
竹枝辭

あつたけりてとあやあひ心
森さむとえ山ふ千鳥のまを

あふく聲

魚貫

鶴鶴や潮來をくして岩つこい

蓼太

南郭文集ふ潮來詞二十首
其序五山堂詩話其外詩歌發句と
諸書ふ散見する處擧て數へざる
一畧之

松屋外集二神社を古曾と
し條ふ伊太祈曾ハ和名抄ふ紀伊
國名草郡伊太祈曾神戶あり且來郷
前神戶須佐神戶ふとふ
並びあり且來をイ和と訓むハア
シタコのアシ比約イ和を
バあり常陸鹿島ふ潮宮と
つくる小祠あり又行方郡板來郷を

今ハ潮來と書々りこハ朝來の誤
あらむと門人北條時鄰ガ鹿
島志ふいへり續日本記四の卷
ふ紀伊國名草郡且來郷と有り

名物 花あや免 川名び

鯉

むら

鰯

鳥

扇島 さいらんふ聲うけらる
田植のぬ

五達

潮來曲の唄

柳よやあざよ直あるをぬぎ
いやふ風ふあびうんせ
さこの三夜の三日月さほよ
宵ふちらりと見こむうり
こーが心ガ竹ふもほろば
目つて見せこや六のむねを
さぬよかいはふ神あるあら
は河てせたまへや今一度
いたこ出トぬの十二のそー
を行つもどろつ志あん橋
戀ふこがれてあふせとより
もあふぬ螢ガ身をこがけ
いこ出島のもこの中おほや
免咲とらつ也若とら
戀のちとぶと單ふいふも
福をみとらふ猫ほや
數あれども余ハもろーぬ

潮來の遊女何某ある時の吟

おもふ事積りてくぐす炭火の如 俳家奇人談

露もやとろく寐らむぬ舟の中 霞水

潮來詞二十首 并序南郭文集三編 二才

甲子春遊鹿島舟下力禰行聽歎乃聲調甚哀頗有情致問之則云潮來所歌潮來常南地名也既自鹿島歸舟登其地就見臨江數百家多倡妓俗雜日夜相聚遊戲蓋東控海西通都率多水漕之利魚監之饒商旅所湊亦江東一都會也其謠大類異歌當讀樂府遺篇吳聲歌曲及西曲諸樂想見六朝謠俗之態其聲雖不知以今視之士風詞情蓋可知也又感劉禹錫聽竹枝之音乃雜擬江南諸樂符此作此詞二十首因記舟行興寄聊自

不見東流水歸舟西曲流潮來風且逆有時不自由 可憐洲裏鳥兩々浮江水日見不識名指顧問客子 門前倚獨樹鬱々掩江涯為是苦心多春來不著花

雲氣南馳曉日紅只將

一雨洗時色不須遠

駕車之とつ笑穩生長江

萬里風

曉笛乃稱川水雲老人球



園邊川 潮來の前北川をいふ北利根川の分流にて末に延方よ
り浪逆の浦に落つ此川の名にむろいこの大和屋太兵衛
抱の棹女をの朝夕びん水を流しくる故のべ川と云とある
ふまづ川 北利根川の末にあり是より浪逆浦へいづ

髭石の芦戦ざくり鯨川 貞翁

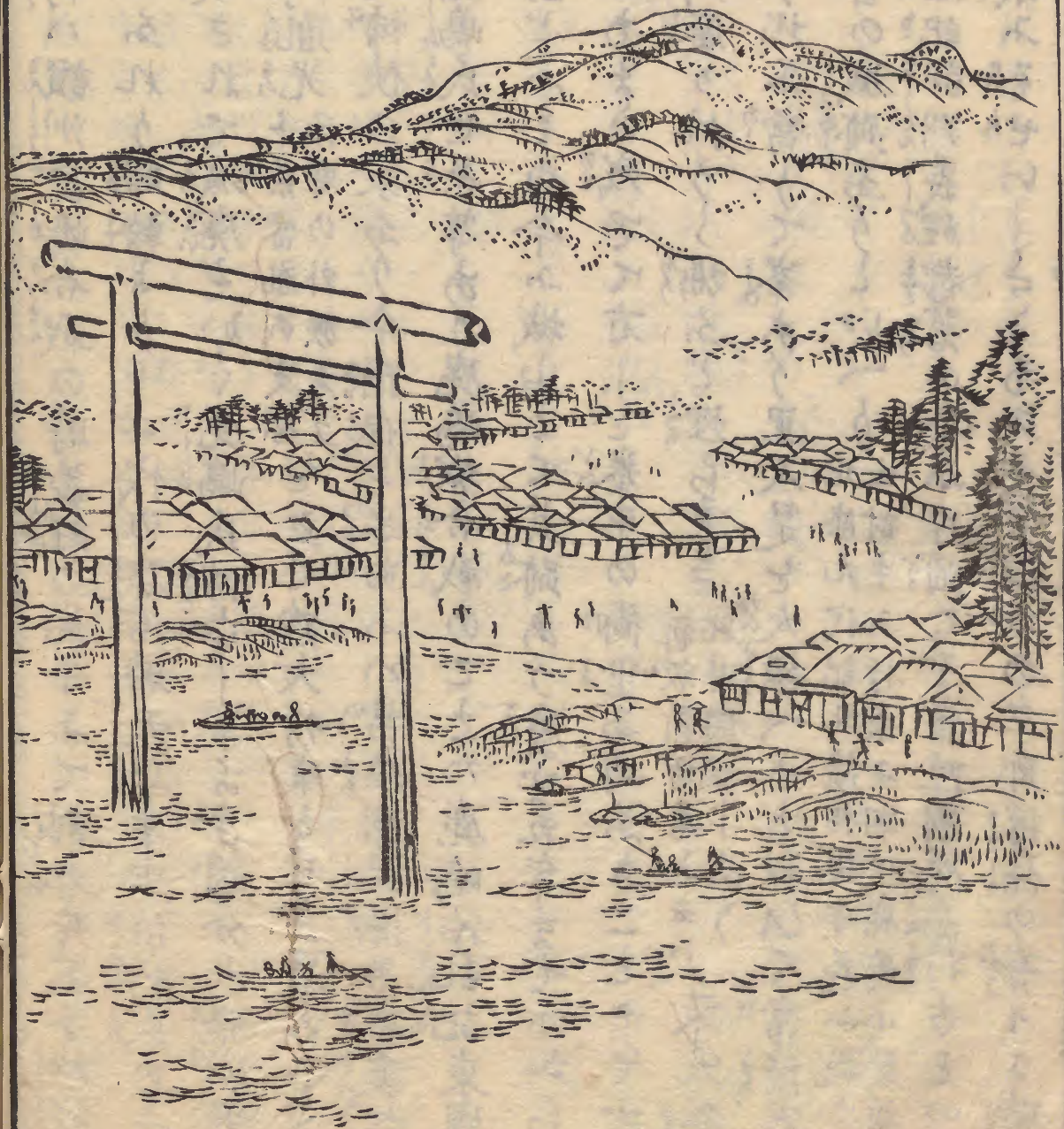
浪逆海 鹿嶋志云大船津の前より行方のめぐりをわけて云り
萬葉集に 常陸あるなさう北海の王藻をひけむえきれ
あどく絶せん仙覚抄に常陸の鹿嶋の崎と下總の海上とのあ
いひより遠く入る海あり末に二流あり風土記にいふをを
流海とかけり今の人々の内の海とある申すその海一流は北の
う鹿嶋郡南のう行方郡との中へ入るり一流は北のう
行方郡と下總國の堺をへ信田郡茨城郡中をいれり然るに
う北内の海塩にまづる時あり波ことふさうのるるまうれば

浪のさるのぼる義ありりて浪逆海といふべきありまう云風
土記に香嶋郡に西流海まう行方郡東南流海云
安永鹿嶋道の記に今日もまう船路もくまづ漕出まう来昨日
あは似き廣き堀江の芦間もくもどもとをく一真ありりりい
つう岸うと遙ふ漕出れば入海とやらんいへまど蒼海うだ
りあうれむうまうとふれとの山も磯にももど遠くまどらあは
浪風あざとくりていと静るれば取楫もさく心也とき十あ
まりれ嶋ぐああかきるとも及ぐとく見也息栖はさるうお沖
のうとさう出さるいあもさらあり
立花ぐ松の洲さたふそれとまつい花でもあまう見ゆる
神垣の御社ふも昨日詰むとの武藏の國府ふていそれあら
まうありう此頃の風ふて船路追手あらば打やまぬ今日ら
よくたきて船路も静あまう船よせむと船子どもいへまど兼

てそれまうけあら祈にたうれとりまうふひの出がごとく行
過ぬるどるく大船津不差ぬ此き一ぬと十八丁むり放せて
海中ふ鳥居をてりといふ今建替の時ありとて見え云
大船津 鹿嶋の神此一の鳥居海中あたてり鹿嶋日記ふ舟津と
いふ是大安寺に私帳ふ津國西成郡船津とみえ平家物語有
王嶋くどりれ段ふ彼嶋へとる船津とも有りて船はく野ふ
いふ名ありりり云ふも神の津ふれむうい津の宮とい
ひいより風土記ふ見ゆ是より神宮へ十八丁
まご大船戸と見ゆ東國戦記鹿島合戦の條ふ文畧江戸崎
の城主土岐伊豫守五千余騎を引率し大船二百艘ふ打乗り順
風ふ帆をあげかゝるをさして押寄るこの事か一まへ聞へけ
めんとまづ塚原の城ふ塚原若狭を大將として五百余騎林
の城ふ林左京大夫を大將として五百余騎神領ふ大宮司
を大將として五百余騎鹿嶋の宮の前ふおける土岐
伊豫守大船戸ふ船を漕寄て敵の様子を聞せける云
鹿嶋の故城 鹿島志ふ鹿島三郎政轉の子六郎宗轉始て築處也

宗轉ハ讚州屋嶋合戦の時義經の先手めて討死其子時轉城
主とふれり時轉より十二代の孫治時天正年中佐竹氏のごめ
ふ殺されて城廢まかく鹿嶋氏滅亡いふより國分大膳次男左
衛門胤光治時の外族ありてを立て惣大行軍とせり是古一への
惣追補使の家あり今猶存を委曲ふ常陸國誌源平盛衰記東
鑑鹿嶋氏世系等あり鹿嶋城合戦のことハ鹿嶋治乱記東國戦
記ふとふも今ふ城山とて其跡あり慶安五年までハから堀
ふとあまご残すて有しを泰平の御世ふ用ふきこととて大宮
司則廣うけう堀ふと埋らまき 新坂新町ふと云ハ 又大船津
より北ふ當りて峯あり里人是を大椽べとといひて常陸大椽
國香の城跡ありといへり 北條九代記北條相模守義ふ従て真
義經記評判義經都落の条ふ片岡こそ常陸國鹿嶋行方といふ
荒磯ふそせいしるものふを信太の三郎浮島の有る時ふ

鹿嶋古城



大塚

鹿嶋神宮
一の鳥居
大船津
の圖



素真

常小也きて遊びる小源平の乱出來候リ草の葉を舟小
ありとも異朝へも渡りなむととんトれる

鹿嶋大神宮 常陸國鹿嶋郡鹿嶋郷正殿武甕槌神相殿神右ハ經
津主命左ハ天兒屋根命を祭り神代の昔より六の所小鎮座

一大神あていともくふる祀事あり風土記小淡海大津朝天皇
初遣使人造神之宮自爾已來修理不絶云とあるせり猶委一
き夏と鹿嶋志小詳ふをハ畧ハ

萬葉集小

霰降鹿嶋ハ神を祈は皇軍小我ハさ小一を

○攝社末社をべて八十末社あり畧之

○祭禮ハ年中の例祭大神事百三十三度小神事七百餘度その内

常陸帶の祭四月十日祭頭二月十五日御田植祭五月御軍祭七月御

船祭七月十日新嘗祭八月初相撲九月九

○名所 要石地上小出する所二尺許石頭小夫木集小光俊たづ

祢々ね々あつる哉千早振山のおくれ石のみまどを

御笠山古木北中おけいと御手洗川二丁むり

高間の原東一里斗り末無川同所碁石濱同所鹿島浦東大角折

濱三里斗壙山神の池南三里斗浪逆海大舟津

○御物忌身潔齋して神小仕一奉る此祭あり物忌ハ神官の内よ

其職と

○大宮司 神宮寺の夏鹿嶋志小詳あり

○神寶 古文書等畧を

○七不思議 要石 御手洗の水 末無川 御藤

海の音 根あが里松 松此著

○七井戸 染井 成井 華柄井 清水井 保太井

寸府井 波左間井

川北



五高港宮



鹿島
神宮の圖

享保道の記仙臺吉 それより興ふのりてゆく浪打除きや津大船大
宮司同神司東主膳出あひてあり此に記ふ立て主膳ハあひ
き所古跡の古跡ふどかよりきうに威徳院觀照院寶照院地福院ふ
といふ真言宗の寺あり大船津の漆家數千斗ありといふ此里
をえぬきて山のかさふ石あてりけさる小橋ありこれ鹿嶋明
神の御神領地あり古のころを藤原郷といふ大織冠鎌足
公に御誕生の地あるもへうくつへり則社もありといふ以て
つづり大織冠ハ大和國高市郡の人と元亨釋書ふ見えさ
り此遠國みて生れ給ひいと云こと成きうば詞林採葉抄ふ鹿
嶋明神ふ參詣しあふといふ事見へたりそれさへいちある
からびさやうの事うりいひ出して後人の伝へなるふや鎌
足公れもちたまへふ鎌も此社ふあるよーをかさる猶信トが
た一近衛殿御家ふはとよりいふよーあを聞ふをまこ鎌倉ふ

かの鎌を埋とるふといふ説もあり何あここれと數あるべき
もれともおろへびいひさる本説ふ瑞甕山根本禪寺とい
ふ寺あり門の額ハ東海禪窟とあり筆ハ書らざれどもふるく
ゆへいりて見ゆ守尊ハ藥師如來推古天皇の勅筆ふて佛殿ふ
祈禱とあそびされふ額あり何まくどり此御甕とて齋の家
ふ今ふ傳甕ありといふ藤原光俊の鹿島を見れば玉ざれれ小
うあ斗ぞまとのこりきふとよとあり此りめの事とぞ云
まよ安永道の記徹山ふむう一此道を祖父君のころらせあふ
道の記ふくとしこれれはやくを彼主膳が宿ふ至りて浴と清め
衣服ふどとりやぐのへてまうでぬまづ跡の宮ふまいる夫よ
りて御齋ふまいる女四五人あつびぬさる中ふおとふひき
る女立出て御酒をくめまよ御齋のりをくらる一和歌二くさ
もてく主膳とらふ居て通しせよと聞ゆれども神廬のお

それともあきばとみふゆらへせん事ことのたぐりふりゆく帰國きこく
此後このちふこそ申まをへきまゝあてまうてぬ御齋みいの歌うた二ふたくさ有ありる
わふみ守護しゆごのころみちれくの太守鹿嶋たうしよの社やしろへ
立たちより給たまふかゝとさふ神廬かみい此こゝ程ほどをおしえうら
い祝いのちの余あまりふ言ことの葉はをほくりあてまつる
鹿嶋祭主御齋光子かしまのまつりぬしのみいづほ
うれしやと神かみもあもりむ今日けふのまごまれあふ人のあふく
まこととせ

又寄國祝またきこくををよみ侍まをる
かゝこゝれ猶なほゆくまぬあまびくらゝおさまる國くにれ御代みよの
民たみくさ
と何なにりなれば日ひを經へて返かへしとて申遣まをし
鹿嶋の御社かしまのみやしろふ詣まをる日ひ御齋光子みいづほ此こゝもとより

と一ひとやと神かみもあもりん今日けふハまごまれあふ人の
あふくまことととかいほけて送まをらるれえ
外あはふまご何なにうおもはんまきふきていのるまことを神かみしう
けあへ

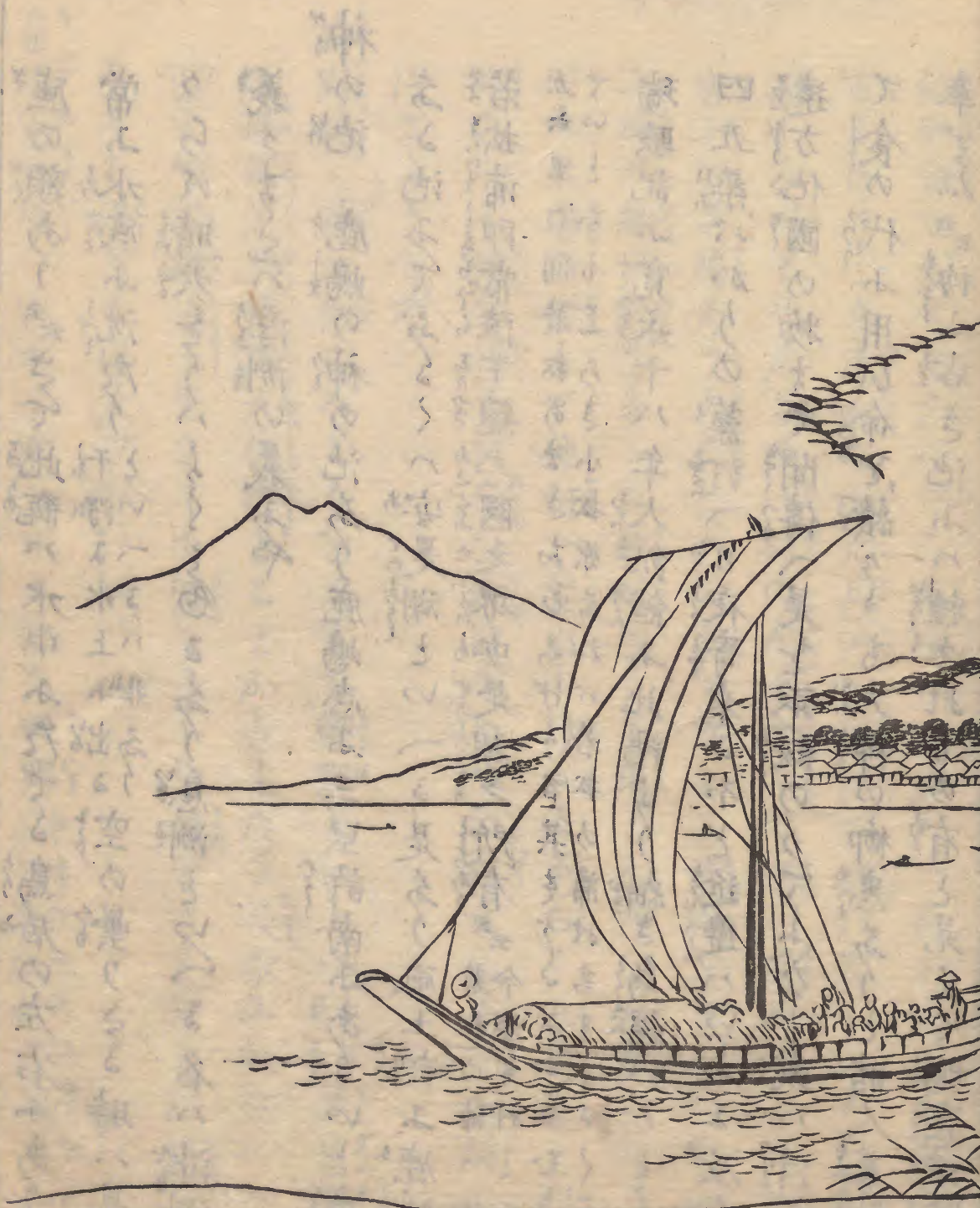
寄國祝きこくをといふ事をよみて送まをらる返かへしとて
代々よつぎりけて治ち國こく此こゝ民たみくさもことむの露つゆふ猶なほあびくらゝ
かくて十町じゆぢやうあまりも何なにも木き立たはぐく所ところを行なて鹿嶋かしまの御本みほん
社やしろふ參詣まをるまきふまさる森もりの志こころをりたるが中なかふじきて杉
此こゝ木き高たかさき何なにとあく神かみさびとと教しよとうとさいのむうとあ
一ひと樓門ろうもんふハ大宮司おほみやうし何なにかゝをはしめ神主かみぬしあまご出迎いでむかてあふい
を拜殿らいでん歌うた仙せんの間まあどいふきらめおごりぎふさりとむとお
がゆ石いしの間まより内陳うちぢんふ入いるおがみ奉たてまつり公きみごころゝ此こゝ福ふくきお
とまればみてくらゐのうせみきを進すするあどいとぐさく海うみ

あづまりて思ふくはるし是より七八丁歩より行て奥の宮ふ
参りまうでけく爰めて又旅粧ひして御手洗要石など行て見
る又もとの道立ちへりて御本社残るうとなくおがみぬ数多
比靈寶をも拜して後宮めぐりたればあるに鑑あり御本社の
内ふ神木の杉まことふまぎぬいくとせう經るものぞ
木高くつとくふの主膳こまやうふかたる二の鳥居を出
てあり百よせて猿田といふ驛のうとふ行日もたけて午のさ
がりあれば高天原三笠山などいへ見むして汲上ふ昼餉し
て夜いとう更て夏海ふ差ぬ云

息洲神社

息洲村の海邊ふあり住吉三神底筒男中筒男表筒男
命を祭る鹿嶋日記ふ處のさは駿河のくふ此三穂の社頭ふ
似たりといえり總常日記ふ汀三十間をうりたぬて海中ふ
鳥居とてり鳥居のきは二三間はれきて神代より比糺といふ

大小ふつあり大きぬもの六尺むくりちひさきハ三
尺むくりも有ぬらんをりも潮干たる時よて船よりれぞき
見ふ水底一丈むくりふいとほざやうふ見え砂地ううく
ちなうむをあらそして見ゆ薄黒きに黄色をそつてりひう
りたりを産ての水ハ潮をくく此瓶のうへれる所のとぞ
さらふ潮のけあくあらそい何さくあぬ云
諸國里人談ふ息柵明神のいそちうに海中ふ女瓶男瓶とてふ
さ川の奇石あり男瓶ハ經一丈あまりふして銚子のかさち也
其口とおがしき所ふ溝あり中ハ控のごとく窪て鑑の形あり
女瓶ハ口より五六尺むくり土罫ふ似たり土俗曰これハ神代
の銚子土罫也と此石満潮ハ二三尺沈めり干浮ハ水上ふ
あつるその銚子の中ハ素水ふして潮の味ひあり是を忍塩
井の水といえり人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歳二月鎮



息淵明神
 船中より
 正面を
 見る圖

素真

座の額あり云々此繩ハ水中ふたてる鳥居の左右ふありて
常ふ水底ふ沈たり干浮ハ水上出ル空の曇りたる時ハ見こ
うらび晴天をりハよくとゆるあり息洲とよめる名ハ沖洲の
義うまゝハ浮洲の義也

神の池 鹿嶋の神の池あり鹿嶋志ふ三里許南ふありいと廣大
ある池みてふるくハ安是湖といへる是あり風土記ハ鹿嶋郡
若松浦即常陸下總二國之堺安是湖之所有云若松の浦ハ此邊
五六里の間若松あまとおひまげり各其まがらふおもむき有
ていとおもえろき小松原なれば若松の浦れ名も一ふるくふん
瑞驗記ハ寛永十八年大飢饉ふ此池より細き鳥繩のごとく長
四五柔ばかりの藻汀ハ日夜寄來るほど近邊ハいふ及むぞ
遠方他國の物まで聞傳へ是を取飯のうへふな一或ハ汁ふ煮
て食の代ふ用ひ命を續くも大神の御惠ありと諸人尊敬一
奉了ぬ云梅ふ古き池ハ種々此もの有と見えて閑窓瑣談ふ

結駝録を引て元文二丁己年播州姫路の一邑ハ池あり廣さ數
百歩あり一或人の小兒其池ハ水浴て溺れ死しけむハ水を
涸して田とせんとして一村の人々合力て水を酌乾せし池の
底ハ白き綿あり土人こまを取て着るハ草綿ふ等しけむハ糸
ハ緑せ織木綿とまふ結好ある着用とまふ尤多く有ハ故
村中ハ用ひ餘りて他村ハ賣出しけるハ色白く上品なむハ他
郷の人ハ價を惜まらば争ひ求けるゆへ一村大ハハ利を得て徳
はきこりとぞ

新野橋 神の池の石どりをまぐて輕野といふ風土記ハ萬葉集ハ
鹿嶋郡新野橋別大伴郷とことかき一なる長歌ハ輕野より舟
出して下總海上をさして渡るゆへを讀てささむそれ邊りハ
あり一橋ありけん云今ハ其の
童子女松原 官本水雲云風土記ハ輕野より今神の池也以南童子女

松原昔一神の男神の少女と云るがありて少女を海上安是の少女といひ男を六那賀寒田の郎子ともいひ一が何をも美麗ある生れつきあて互ふ思ひ逢て遂ふ契りを結び一が人目を愧て二樹の松ふ化せ一事をのん是今の常陸原地ふ河さきバ鹿嶋の攝社とて古く祭で来きる手子后明神ハ神の少女を祭り一あるべ一古ハ常陸原の地下總海上郡ふ屬せ一由も風土記ふ見ゆき此乙女をも海上といひ一あり安是の地名も風土記ふ出たり寒田ハ今三田といひ此邊皆いあ一那阿郡の地ふて神龜以前ふ鹿嶋郡といあり一也

手子崎明神 東下の羽崎村ふあり鹿嶋志ふ旧記ふハ神遊社ともいへるよ一とえてすハ大神の御女の神也といひ傳へたり按ふ上つ代香嶋郡董女松原ふ則羽崎神の郎子神の嬢子と云ありてかときふむつひとるるが逐ふ松樹と化して奈美松

古津松といへる故事風土記ふ見ゆされバ古の童女を祭る社ふハあらざる嬢子を手子といひハ女子を愛しといへる名ふて万葉ふ葛飾の真間ハ手児まと埴科の石井の手児まことさここのりの手児ふいゆきあひあどよめハ手児もあふトさて手子崎ハ此ここのり海の出崎をれを手児の住る由もてさといへるあふん云

羽崎 東下の羽崎村あり此邊をてて羽崎舎利高野別所海老臺本郷アラク古の七箇村を合せて東下といふさて此ところハ鹿嶋の浦より浅がきいと廣き砂山の木草もあふ赤々と名ふる砂地を経てあふ至るハの光俊朝臣の家集ふ康元元年十一月鹿嶋の社ふまうで彼嶋のさきふはうりて見ゆ我國ハ東のそふあふ有るこの社より崎までハ七里とぞ申めると云り一ハ古の羽崎のことふてぞいへる

○是より川南

側高明神 香取郡大倉村山の頂あり古松繁りて神々しき森あり香取第一の根社ありとぞ祭神ハ古一より秘て云ざりしと云ん鹿嶋日記ハ側高明神といふあり年ごと小鬘撫の祭といふことありその酒宴の席を設て賢酒をくみかえしも一口此あつりの鬘あでし者あをを志ひて三杯のまきるならんありといへり云

粟飯原氏城跡 分郷村ふあり今城山といふ土手堀の跡ま大ある石櫃ふどあり小見川より西南六の城も小見川ととあへしあや常總軍記ハ小見川の城あり粟飯原左衛門小見川越前守と見えたり

木内大明神 木内村ふあり諸國圭齋録下總國の部ハ七石木内大明神 香取郡木内郷 木内伯耆同五石熊野権現 香取郡府馬村

宇井左門あど見えたり

小見川 香取郡あり内田彦の陳營あり諸州採藥記云小見川内田何某領内ハ四季咲の櫻二ヶ所あり一本ハ八重あて一本ハ一重ありと見え 此さくら 栲樹トて今ハあり天正十八庚寅年

領地拜領下總國香取郡小見川 八千石松平

東源軍鑑三藤澤合戦の條ふ云小白天菴ノ旗下ナル小見河越前守輝賢ハ小櫻威ノ鎧ニ三牧甲ヲ着テ河原毛ノ馬ニ乘リ云

爰ニ梶原美濃守景國ガ家子梶原平左衛門トイフ者心ニ思フ様彼六人ノ者ハ近付テ討タムト叶フベカラズ然レ氏彼等ハ

武勇ニ高慢シテ動モスレバ諸軍勢ヨリ先ヘ進ニ出ツル匹夫ノ勇者トハコノ人々ナリ何トゾ一人モ二人モ射殺サムト思

ヒ唯一人攬ノ木ノ蔭ヨリ子ラヒヨリ既ニ二十間ニハスギザリケリ平左衛門矢頃ハヨシト悦ビ思フ様ニ引誥兵ト故ツ其

矢アヤマタズ小美河越前守カノドブエニ葛巻攻テ寸破ト立
ツ急所ナレバ越前守馬ヨリドウト落タリケリ云ハ此六人ト云
由良判官則繩戸崎大膳亮長俊行方まご附録ハ小田天菴氏
形部少輔貞久海上主馬五郎武經也
治公旗下ノ城々小美河ノ城主小美河越中守と云
黒部川 同郡府馬志高稻荷入の村々より流を出づ是を黒部川
といふ黒部の橋あり此橋より下を九十九曲川といふ屈曲凡
二里許き出の小見川を経て利根川入る
七本木 小見村の富光山徳聖寺庭中ハある銀杏の木をいふ此
本周り二丈をかりはまを寄生六本ありハ樟 松 楓
南天 竹 ウシコロシ 是あり銀杏といふ七本を依て
名づくといふ
清水観音 清水村ハあり清水寺といふ十一面観音を安置を世
人筆を禁食して小兒の病を祈る参詣駭ハ

又顔観世音 五郷内村樹林寺ハあり靈驗あらとある観世音也
門外ハ高き石坂あり此石坂を逆さふ向て這下るといふ小兒
の病を除くといふ宿願ハよりて参詣する人の皆さうさハ這
おりのありハ寺もと壽林寺と書ハふや常總軍記ハ
此所ハ千葉の軍大將東六郎鎮胤ハ領地あり六郎幼少の時よ
りハこの壽林寺ハて手跡學文も習ひ師弟のハより有る上地
頭あり菩提寺ありハいとくハならざる寺ありハうハ今ハとも
折々ハありて他事ハく申ハかハくハせハくハ云ハふハど見えハり
四季咲の櫻 庭中ハあり周り五尺許石の玉垣をめぐらハ花
重ありむハり小見川ハ有ハり櫻の種ありハ或人ハいハり
千代谷 本堂の後の山ハ至りて西北を望めハつと廣々ハ
耕地ありハの邊ハ一圓ハふ千丈ハがやつハとハ又千葉氏族の
住ハり河ハりふハ千葉が谷ハとも云ハといハつり東六郎が城跡ハ

平山と云所いへふて笹川ささ臺たいふ大門だいもんの跡あとあり
名物なぶつ笹川ささ蜆しんとて此邊こゝ石出いしだ今泉いまいずみのあつり追多おほく出づ

椿つばきの海うみ 今干いま河か八万石はちまんごうといふは是こゝあり香取志かき云い神宮かみみやを相距あひまた夏なつ
六里許むつりごほ香取かき逆さか瑳さ海上うみ三郡さんぐんの交あひ接ひき周めぐ匝う十里餘じゆりちり此湖水こゝのうみ今いまの
消歌せうかして田園でんえんとふもり古老傳ころうてんて言い大古おほこ此所こゝふ最大さいだいふ椿樹つばき
あり高さ數かず百丈ひゃくじやう枝葉えい三里さんりの間あひだふ杖しやう既も一いつ華はな咲さ時ときの天紅てんこうふして
散時ちりの地ちふ錦にしきを敷しくと疑あやはる吾大神われおほかみは影かげ向むかひり此木こゝの木
壽盡じゆじんて根ねと共ともふ自ら倒たふる根ねの跡あと湖水うみとあるあり回まわて是こゝを椿つばきの海うみ
といふ上枝うへえだの方かたを上あ總すべといひ下枝したえだの方かたを下くだ總すべといふ畧りやく此湖こゝのうみ
水みづの備いふ椿村つばきむらと云いふあり椿海つばきうみふ回まわて然しか跡あとせり又また湖水うみより逆さか
瑳郡ささぐん矢挿やさし浦うらふ到いたる夏なつ三里許さんりごほ然しかるあり寛文かんぶん中人あつちゆうじん有あて官くわんふ達たつ一いつ大
命いのちを奉ほうて地ちを掘あ湖うみ水みづを矢挿やさしの浦うらふ流ながれ水陸みづかき田でん數かず千町せんぢやうを獲とる
了斯しよす人民じんみん移住うつりすまて十八村じゆはちむらとふれり各共あひともふ椿新田つばきしんでん某たがひの村むらと稱なづき

世俗せきよく于に河かといふ是こゝあり田海でんかいの變時へんじ有あて湖水うみ變かりて民屋たみや田園でんえん
とふもり然しかと今大宮司家おほみやうしけ毎年まいねん二月初子丑にげつしうしの日ひ椿海つばきうみの祭まつりあり
是則まづ古こ一いつ此湖水こゝのうみ神宮かみみやの池いけあり一いつ時ときの遺則いぞくあり云い

石出いしだ 此所こゝハ利根川りこんがわへあり出でるところふて常陸原ひらぬまらの砂山すなやまと

相對あひたい風景ふうけい至いたてふ所ところ一いつ千葉ちやへの氏族しゆく石出いしだ日向守胤朝ひむかみゆきむねあそ

鹿嶋日記かじまにぢふ云い流れのまゝにくゞれば光俊みつとむねの朝臣あその霜しもふうれ
たるなどよほを一いつ萩原はぎはら此こゝとゆととる方かたよみゆその東あづま隣りん
ぬる日川ひがわといふ里さとふ沙山すなやまとて草木くさきふどもなく砂すなの立たつたのふ
も高山たかみやまあり右みぎのうさへもつあさの國くには香取海上かきうみのふこ
つの郡ぐんはどきたり海上うみといふは山上やまの上の憶良おくらの臣おみの鎮懐石ちんくわいしの
歌うたの万葉まんやふ五いつはここれとねきつ深江ふかゑのうなうみの子こ負おれ原はらと
よ免ゆるををねりへ海うみのふとありあるふこ此名こゝのなふりりり此こゝ
まの河かのひろき坂東道さかとうぢ七里しちりあもほまりぬべ一いつ云い

湖城
喜一
寫

石出より
常陸の
砂山を
見ろ



二十六

砂山



岩井不動 岩井村ふあり二王門本堂鐘樓堂いとをござるあり
山の上より清水落る瀧口數る所あり四十八瀧堂の後の方ふ
大瀧あり病人死生の願此所ふ垢離して護摩をこく死病の物
を忘るといふ

下閨ふかじうぬ關伽の雫る

蓼太

奥の院不動明王ハ春日の作といふ同岩屋二丁むりり通りぬ
け瀧あり左右ふ三十三所の觀音有り大師遊歴の地と云

猿田大権現 猿田村ふあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石

猿田権現海上郡猿田郷 石毛伊織とも也又新義真言部ふ十石

海上郡舟木郷 東光寺ふと見えたり

高田川對陳 常總軍記ふ云畧斯て常州岡見の長臣栗林下總守

義長の印西松夷臺より此處へ陳をうつり利根川を背ふあて

て高田川の岸ふ陳惣勢合て五千餘騎旗さし物を風ふ靡

陸伍整々と備はりまゝ千葉方ふ東六郎鎮瀧を大將として

三千餘騎次將ふ二条大藏五百餘騎鳥居筑後五百餘騎村田

兵衛五百餘騎千葉が旗下のあつはり勢その勢都合六千餘騎

高田川の端ふ押もせ川を隔て矢軍ふ數日をおくりていまご

墓々き軍もあうりうて爰ふ義長熟々と思ひるる千葉の

主戦ありて目ああまる大軍先手まで六千餘あり後陳あり

はちば二万をさるべし我の客戦ありて味方ハ小勢あり自余

の如く軍せむ千ふ一つも勝負あつりまづ千葉方の大將共

比不和とあるべき反簡を行て同士軍させ其弊ふ乘て兵を出

して勝負をさるべしと思ひ志むらく其術を工夫しりるべき

いと考へ出して腹心の家人を潛り小壽林寺へ使ハし主人の

病氣平愈の祈禱をたのむ其御禮として貞宗の太刀一腰并ふ

神馬一疋飼料として黄金十五枚を奉納せらるる爰ふ千葉

の惣大将お命ぜらせし東六郎の武運長久の祈をたのみんと
壽林寺のいり法印お對面し戦場の習ふをバ再會の期し
しとまづ酒宴をありり額殿おはあき置る馬を見つ
け立寄て是をさるお黒のぬとき遅まき馬おして八寸餘
き名馬あり六郎常お馬を愛まきまひとくぬ男ふれ
ハ頻りお是をほくあり誠おむく宇治川を越し摺墨もい
りでう是お増るべき天晴の駿足うふこの馬お乗戦場お出る
あらが海山も一飛あらん願ひく此馬某おたびあつと頻お
是を所望しられ法印も出家の身故馬の入用あり去あつ
他の人あらんふら奉納せし人の思ひくもあきが辞退もまき
きまふれど君の大檀那といひ殊お國の守あり師身の約もあ
まバ點止がくし所望お任せ進上せんと申されたり六郎大お
よろこび観音の寶前へ米五十俵を奉納して馬を率てて帰り

り義長の思ふまじふ斗策ふれりと心ふうあづきおそふ
敵の陳中へ忍びをいせ云いめりり此度壽林寺の吹峯あて
六郎殿の義長の味方とあり近日高田川を打渡し合戦あつ
らあつて裏切まきと淺瀬を案内しむそつお契約せられ
たれば義長が秘藏せし黒の名馬を六郎殿お参らせたり是の
乱軍の節六郎殿の目印あつとゆことしやうお雜説をぞ申
る此殿づけといふあつと足利の代お吉良今川を殿つけ
とて吉良殿今川殿とよび公方たゆ時ハ吉良より縋べし
尊敬せし時ハ今川よりつぐべしと御證文を下され惣下座お
大納言家康公を殿付とせり御當代いたりても御三家兩御
殿の類殿つけ惣下座ありされは其須千葉の家おて此六郎
びらふとあり二条大藏鳥居村田是を聞き大おあやし疑ひ
りてされは六郎殿逆心ありとて評定ふし二条下知して六郎
を招き饗應の帰り路岸山とつ難所お伏兵を置鉄炮を以て
討取べしとをりりとも六郎是をさどり道を替て戻り

ろバむふく是も止りり斯て東六郎の大ふいかり二条
が伏兵小既ふ命もあやうりり此度そやくも悟りろバ其
場をのがれまぐ小陳所へ押うけて大藏を討ん度安しといひ
ども内乱をおそれおとるふ今大藏二条へ歸りさる上ハ何の
おそるゝ處あらんと逞兵百五十餘騎をささぐひ二条が館
へ押寄我こそ東六郎鎮胤あり岸山の謝禮お推参せり首を
渡さべしと云もあへど真一文字ふ切りる大藏も六郎と聞
しるバ今ハのぐもぬ處と思へもせ出て戦ひしが河うハ六郎
ふ及ぶべき終ふ切たをささるるを六郎が郎等堤大助せ寄
て首を取しるバたちまち館ふ火をかけ一遍の煙とそありふ
り東六郎鎮胤より七代の祖東下野守常緑ハ千葉常胤卿の
宗族御先祖の御分郡として東郷をたぬりりふふより
千葉下野守を改て初て東の下野守とを号しなるあめ下野守
ハ歌人あり今地下小歌道の傳はる度此人より始る東下野守
りハ是此高弟を種玉蕃宗祇といふ宗祇の傳を三条殿へ
傳へ道遙院稱名院三光院其御子を圓智院公國といふそのめ

御子を三條大納言實條といふ公國の高弟を細川玄旨法印と
いふ古今の傳受を丹後たふべの城あてり奉り度その
頃書小くハ此下野守ハ此度とくく佐倉へ聞しり
東六郎より七世の祖あり此度とくく佐倉へ聞しり
ハ千葉勝胤家臣小命して次第を正し一老臣原式部が父胤總
入道了月大須賀小隱居して在るるを招きよせ評定お及なれ
バ了月が日二条大藏ハ敵の斗策おちりり我罪おのれとせ
むる此處也六郎殿ハ一点の不忠おし猶又此度高田川の夜
軍小鳥居村田荒海の三將打死せし由聞及べり又義長今度兵
を出を度全く千葉を亡ぶべきふもあはば唯武威をえめ
けの一通りあらん此度の御和睦有て然るべしと則神大寺和
尚を頼し小見川越前守ハむり天菴の旗下あて相知れ中
ふもバ小見川を差添義長の陳遣しるも義長も志と約し
まふりち勝胤の姫君十三女あるを岡見傳喜が三男谷田部の
岡見主殿との妻と約し傳喜どの末の御娘を御舎弟大須

賀四郎胤信の妻と約せしめ両家をもとめく人質を取かそし
てくかふく御和睦とくへのあれば双方陳をぞ引取ん於取本意
海上八幡宮 芝崎村にあり諸國主齋録下總國神社部小三十石
八幡海上郡芝崎郷松本長門とも例祭六月十五日出興あり
右三座ありその海上八幡と松岸の宇賀大権現と本所の妙見
宮あり右三座の御輿一箇年の垣根村御假殿まで一箇年の鉦
子長崎の濱墨石の上まで是隔年あり
世人此邊よりをべて鉦子と稱ふ

松岸 鉦子往來の旅人此河岸より揚る濠肆有ていと繁昌あり
地あり是より長塚本城松本今宮荒野新生ふとを経て飯沼の
觀世音ふいふ一里間總常日記小松岸といふ舟をてたりふ
こより飯沼かけて岸ふのぞめる家居ども見とさきふ時いら
ぬ雪のありはとくあるちとるの皆蠟の目もてふるあり

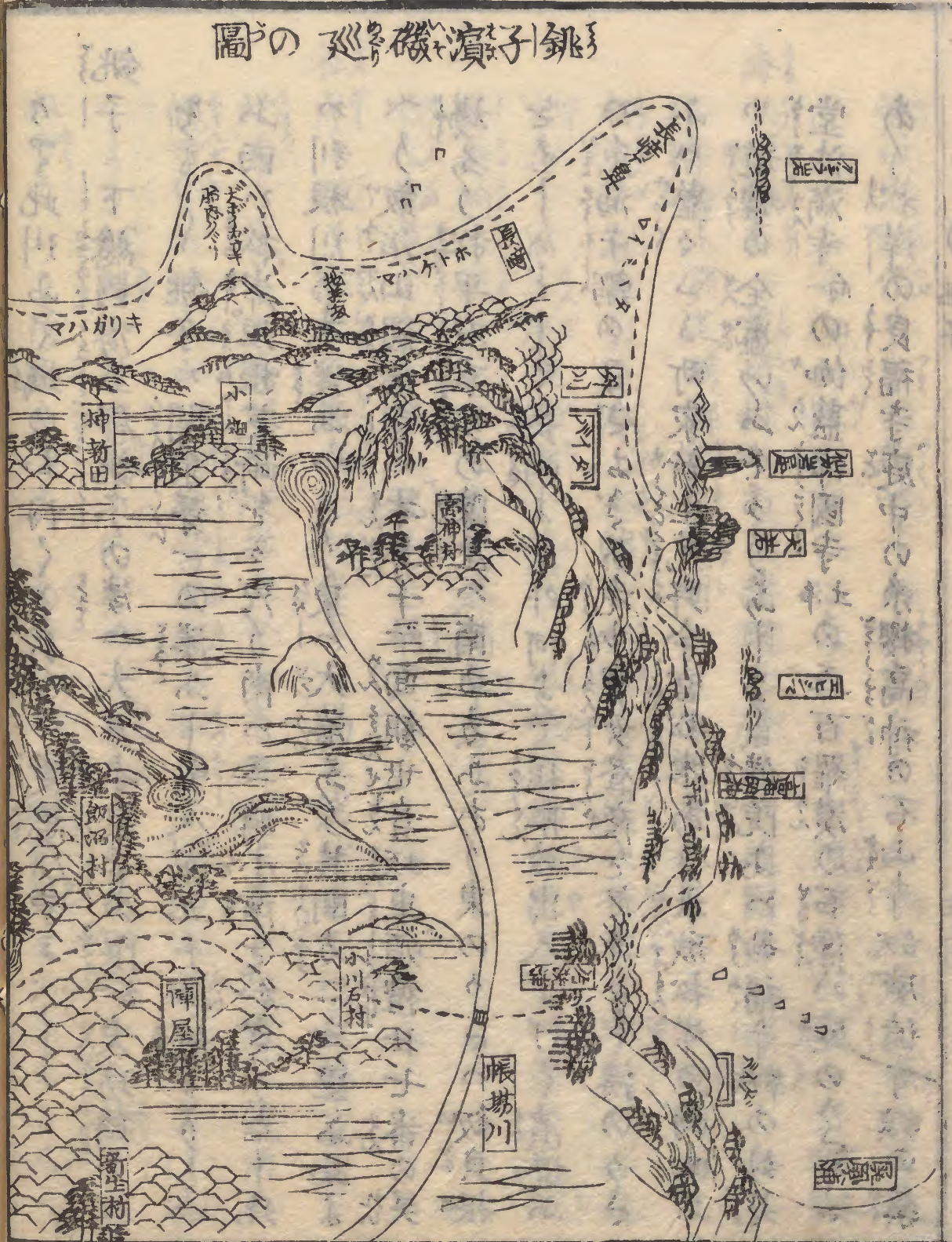
りや此川みて蠟のおほくとらるる、夏思ひやるべし
鉦子 下總國海上郡鉦子の湊に大日本東方の限名 犬坊崎と云

そもく、鉦子の関東第一の湊ふしを人家五千ふ餘ありとい
ふ西の松岸垣根芝崎をりたり南の三崎小濱をかざりたり北
の利根川の末湊ふいより東の大海あり其間方二三里ふおよ
べり飯沼山圓福寺の本尊十二面觀世音坂東順禮廿七番の灵
場あり松平右京葵の陳屋の南の方ふあり東のうらひ飯貝根
をそしめとして長崎より外河まで楯船の出入りげく濱邊ふ
の魚油干鰯の己さおきふ老少男女昼夜をこころを湊のうら
ふの整々たる町家新生荒野今宮松本あり本城松岸の両町ふ
の遊樓の全盛いふをうりありまの佛院ふの妙福寺華の妙見
堂法満寺向の伽藍淨國寺土の五百羅漢の石像ハ庭のうらふ
あり松岸の良福寺庭中の系櫻高神の石山寺台威徳寺真の藥

鉦子

三十

鉞子濱磯巡の圖



師如来ハ天竺より渡らせり小尊像といえはく東の方へ
り出々山の上への和田の不動堂石階の左右に龍あり去の山
小登れ後の方の蒼松の黛色濃ありて前ハ東海ふのぞと奇
岩左右に聳へて風色斜ありて濱めくろりの人々もまづこつふ
憩ふて時をうけむ勝地あり

飯沼観世音 飯沼山圓福寺十一面観世音 坂東二王門鐘樓垣
本堂の額圓通殿得水書 二尊塔龍藏推現 銅石華表あり境内ふ
見世物輕こざあむる其外茶見世多く至て賑ハ
定芝居ハ今宮の芝町ふあり 座本 梅本妻太夫

諸國圭齋録下總國新義真言部ハ三十石 海上郡飯沼郷 圓福寺
こもゆともく〜といへる名の志摩の國に蒼志と音か
よしたれを假名も天不志とかくべく詞の心ハ出伏ま〜の遠
伏ふとれよ〜あるべくおぼゆと與清鹿嶋日記ハ〜

寛齋遺藁四 遊銚子感事而作二首

風波千里幾辛艱孤負春光忽自還何計平生如意筆却教今日
恨空閑

東海之東渺々波飛帆礙眼亦無多春雲底事癡頑甚不使我爲

觀日歌

去の外五山堂詩話ふ種々の書ハ詩歌等多く見ゆれと畧

名物 千リメン白魚 鯉の塩辛 鱸 牡蠣

防風 松露 傘の醬油 廣屋ハ海 吉野屋料理

海藻蒟蒻 世人飯活 味噌汁 煮て産婦あとそらの薬と云

觀音より 西の通ハ 觀音前荒生中町田町荒野橋本町竹町通町

袋町明神所萬所芝町富田屋町通石町今宮目出度町今宮芝町

唐子町夫より大込松本本城長塚松岸ふ連を

ま〜觀音より東の方を飯貝根とつふを

町。清水町。橋本町。通町。田場町。植松町。東中町。是あり

東下町。西中町。西下町。市丸衛門町。本町。竹町。是あり

清水の井。飯貝根清水町ふあり。方二間をうり。石ふてかときこ

る井也。鉾子第一の清き水あり。水汲人終日群集ふ

和。田不動堂。和。田の南山の上ふあり。石坂の左右ふ瀧あり。風景

至てよ。川口明神。川口の方へさし出たる山の上ふあり。拜殿ふ白紙大

明神の額うし。是より川口を眼下ふ見おろし。常陸原より

鹿嶋の浦奥州の浦々。追も見渡さる。鹿嶋日記ふえもい。えぬ磯

べのさま。岩れたぐまひよせうへる浪とらあつめさるあ

れさ言をふもふんであもはくし。かごめどろのふ航うけ島

三一嶋ふどいづれもめづらしさ。ふ目ひらうれぬねきさのうと

ハ東の海雲ふつら。たてそれたをみをあらう。浪の花ハ咲覽

ねをた海は沖ふ枝。えもみえふくにい。うでう浪の花ハ咲覽

云傳ふむ。四日市場村。長者あり。其娘を延命姫と云。上富
田屋町の形部と云。もの媒あて阿部。清明を聳と。小濱村の海
至て見ふく。清明是をた。長者の家を遊いで。小濱村の海
の端。草履をぬき。捨身を投。長者の家を遊いで。小濱村の海
て。思ひ隠。姫後を追。け此所。来り。底の草履を見て。大安寺ふ入
き。我もと。思ひ定め。海へ飛入り。底のみく。成ふ。なけ
斯て。姫の尸。川口。流れ来り。所の者共。引あけて。菫と。搦と
を。納め。祭り。故。不。菫。大。明。神。とい。え。り。る。を。い。は。の。頃。ふ。う
白紙の字。あ。や。ま。れ。り。と。云。此。神。も。と。よ。り。顔。形。の。そ。ふ。く。き。を
う。と。ふ。る。故。あ。や。世。人。髪。の。毛。の。色。あ。く。さ。ま。さ。ハ。ち。と。毛。あ。ど
の。人。搦。を。奉。り。て。祈。誓。せ。れ。バ。験。あり。或。ハ。顔。の。で。き。も。此。あ。ぎ。ふ
と。有。人。ハ。紅。粉。お。ろ。い。を。奉。り。て。祈。す。小。神。妙。不。思。義。の。靈。験。あ
り。と。ぞ。又。鉾。子。濱。長。く。不。殫。の。夏。あ。せ。バ。川。口。明。神。を。い。さ。免。の
口。明。神。へ。奉。を。バ。奇。妙。ふ
大。獵。と。成。と。い。え。り

千人塚。川口ふ有りむ。獵師の海中ふ溺死。あるを葬り

塚也。と云。石像の地藏尊。建り。毎年七月。鉾子中の寺々。其日く

の定めあり。て此塚の上。あて。施餓鬼あり。何人の詠ふや

うと。か。と。此。死。え。あ。の。む。う。あ。て。今。ふ。泪。ど。の。法。也。此

ぬる塚。ま。と。捕。船。の。風。あ。く。く。て。帰。り。お。そ。き。時。ハ。此。塚。の。う。へ

ふて火を焚川口の目印とさる由ふて頂ふ火を焚跡あり此
塚の側ふ鉄炮の臺場あり世人川口の御臺場と云

川口 則ち鉤子口あり岸ふ添て一の岩二の岩といふて大
る岩二箇所あり其間凡五六十間許此岩より常陸の羽崎迄ハ

程遠けきど海浅くして船通せん依て此岩の間を出入を至て
難所ありといふ大荒浪の岩ふあつて打くづけるさぬいと

おそろし
是より南の方へ儀つゞきふ行を濱めぐりと云名所多し

目戸ヶ鼻 東海第一の出さきあり川口より此所までを平磯と
いふ色々の名貝小石多し帆うけ石ハ海中ふたてり七月廿六

日の夜鉤子中の老若男女此所ふ出て月待せ群集大方多し
葦鹿嶋 めどヶ鼻より此所までを黒ハへ濱といふ黒石多しあ

しう嶋ハ岸より四五所許をふれて小嶋ふとあり年中あり

此嶋ふあがる夏二三十或ハ八九十多き時ハ二三百足あも
及ぶ波打きこふひとつの岳あり是ふ登りて望する小救百の

あしうかさあり合上ふあり下ふありるい遊ふさぬ大の子
の乳を争が如し其鳴声白鳥のふくぐ如く遠く追聞へてさハ

かし中ふ大海瀬一疋高き所ふ登り四方を見廻し一番をふき若
船近する時ハ鳴て群を驚うし悉く水中ふ飛入る是をあしう

出の番いつふても居らぬ夏あし鳥銃を以て打扱る大き八九
尺を大とて海中を行時ハ半身を水上ふはらり立て潮を飛

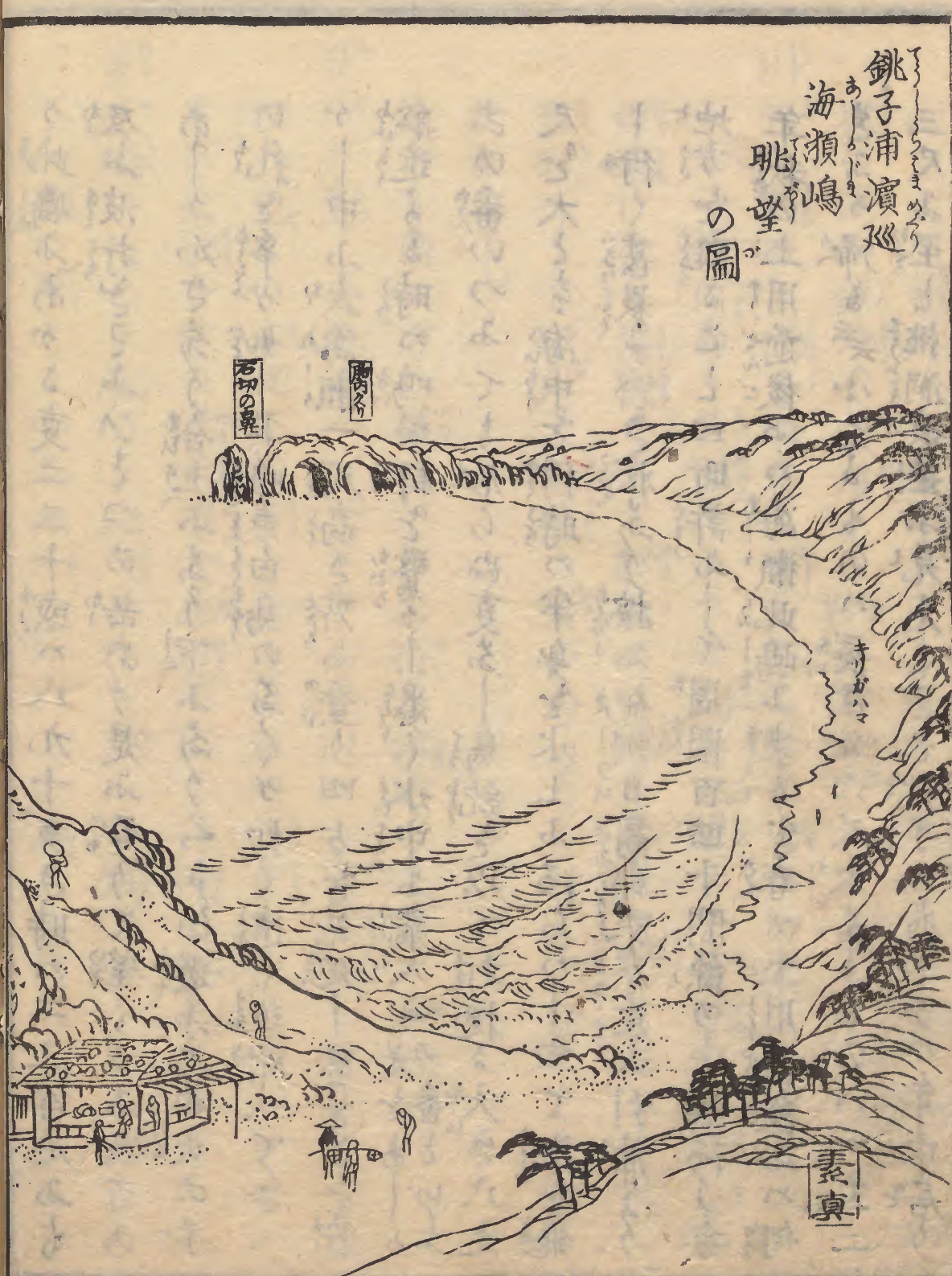
し行く甚畏るべき状あり按ふ紀州日高郡衣奈庄大引浦より
地方を離ること四町許ふして周圍百四十間餘の小嶋あり毎

年秋の土用前後ふハ海瀬此嶋ふ来りて春の土用前後ふハ何
きふり歸る云小あるものハ長さ五六尺大なるものハ一丈二

三尺ふ至と挑洞遺筆ふ見えとせと鉤子のあしうハ年中居り



銚子浦濱巡
海濱嶋
眺望
の圖



六
大ききもまゝ八九尺ふ過ぎなきと形状の同トさまあり頭小く
口尖り歯牙大の歯牙ふ似たり目の大ふして耳至て小さく吻
鬚粗く長し全身短毛あり常の品の其毛茶褐色ありまゝ白色
黒白雜色蒼黒色も有り左右の扁鬚爪ありて末ふ岐あり尾の
獸尾の如くふして至て小さく尾を扱て又兩鬚あり是れ
爪五ツ有りて末ハ分きて指の如し奥州津輕ふて此鬚をテツ
ビといふ又臘胸獸のヒレも鉄毗と名け皮ハ褥とふし或ハ馬
臭ふ用ひ或ハ荷包ふ製を肉ハ剛くして味佳あらば本草ふ主
治を缺く東醫寶鑑ふ曰味鹹無毒主人食魚中毒魚骨傷人及喉
鯁不下者又時珍食物本草ふ曰味鹹甘平無毒食之消腫及癰瘡
邪氣結枝骨燒灰服治鼓脹腫滿まゝ脂ハ金瘡ふ傳て良云一説
ふ海獺の大なるものを蝦夷ふてトバといふ又紀州の阿志加
ハ海驢あるべしといえりニチとトバといハ同物あり海獺と海

驢ハ同類ふして別物あり形ハ海獺より大ふして體ハ瘦せ其
毛淡茶色ふして左右の鰭ハ海獺より短しこれをもて異と
を此外ハ海豹獵虎臘胸獸その外海獺ふ類ハ海獸甚ど多し云
諺ハ鰭の大なるハトバふあると世人ハよく云々あり先
年銚子の濱近き所ふてトバの死しあるを拾ひ一人あり是ハ
トバ天上せんとして途中より落くるもの也と土人云あひり
其形尋常の鰭より大あれども別ふ替る夏ふた鱗の間よ
り太き毛多く生出し頭より尾の方段々と毛長く尾不至てハ
長さ二三寸も至きりとを此外ふも如此トバを見くもの
折々ありといえり是もトバといふものみや
按るハ海獺の大なるをトバと云といハ古の海獺も天上ま
るものに見えたり想山著聞奇集ハ文豊後國佐伯侯の藩士間
某七郎右衛門と云て側用人砲術を好で江戸表火術の師家淺
某ふて勝手方勤る人のよし砲術を好で江戸表火術の師家淺

六 銚子

羽某の門人也天保五年甲午九月山嶺をせんとして一兩輩と共に
小六奴玉の鉄炮を携へ佐伯の城下より一里半程有る海岸
雲止山と云ふ遊びくる小海上俄に黒雲を生じ烈風海水を巻
あげ暴雨車軸を流し山海鳴動して物凄く遊士も側ある堂小
入て海上を眺む小何と云ふ海の中より雲より降り果て
る有さぬめて雲間小火焰ひらめき真一文字小鉄炮を差して
鳴り来る間氏へ勇猛の人ある故直小鉄炮を構へ矢比を待て
彼煽々たる火焰を目當大空を打たる小手ごとくもあけまらば
打そんとする夏と心得其内小雲も吹拂ひ晴天と成るも急
さして心小留む其日の帰宅ありと云ふ事さして夫より三日
め小同國北浦と云ふ所の獵師何とも知をぬ大なる海獣の汝小
つきて海濱小漂差せし由代官所へ訴へる故城下より小目
付役を初め役人あまると相越段々様子を窺ひ見ると老海獺と

見えて惣身短き毛小けて色ハ茶色おて背通りハ黒く濃く腹
へ薄茶色おて鱗大きく惣長さ七間三尺横巾九尺許有て實小
老ぐらゝき海獺あり役人逐一吟味し然れども惣身小聊々の
疵もあぐたぐたの目小穴ありさぐり見れば六奴の鉄玉出さ
りまを正しく間氏の打たるありと此夏具さふ主君の聴小達
しるをバ打たるものゝ手柄ありとて則間氏へ下されしと也
依て城下へ引取まづ皮を剥肉を切ふ背骨ハ思ひしより細く
外小小骨もあぐ惣身肉の多多く白色おして油多く味鯨より
美し此肉勞症の薬もて一度食へば子孫小至る追其病も合し
て一家中の申ふ及ばを遠方のもので間氏へ食ふ来り或は
貫ひて行も多く悉く施し盡したりと也さて其皮を泥障と云
して第一を君侯へ献上第二を國老小贈り第三を江戸小持来
りて師匠の浅羽氏へ贈る其餘をべて泥障十八懸とありしを

同僚の人々も分ち與へると也をべて海濱ふてハ魚龍の昇天
まゝ夏折々有ものありと云 右師家の浅羽氏の主馬政徳と云
居の人あり諸國ハ門人も
多くありて名高き人あり

カシ石 海瀬嶋の邊海底より出る黒石めて里人カシ石と唱ゆ
石質石炭の類ゆて至て上品あり黒色光澤漆のおと

を藏を高さ七寸
方五寸せうり何

アハハ獵師の綱

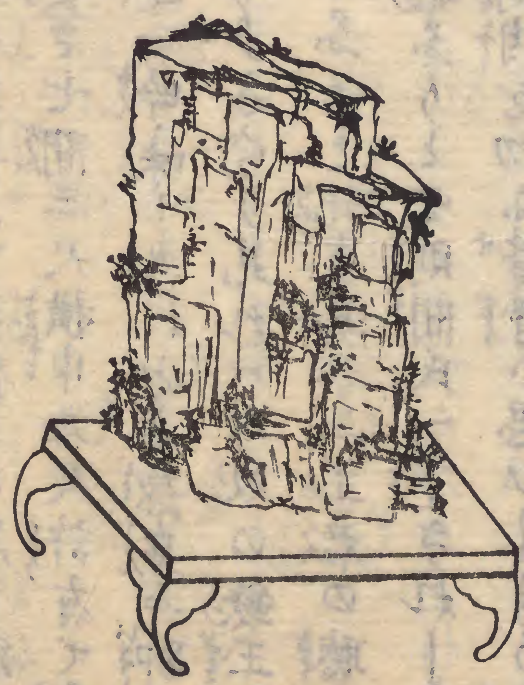
みかゝりて海底

より出るものゑ

り故ふ大なるハ

あしと云 大抵二

大と此如此大なるハ多
と也里人大ハ珠と也



犬吠が崎 海上砥荒砥是より出る故ハ石切の鼻とも云此所ハ

胎内くゞりといハ岩窟ありて浪うち涯へ通りぬけ岩山へた

登る甚と難所ありありハ嶋より此所までを霧が濱といハ大

浪の打寄る磯輪まきバ浪志ぶき飛散て常ハ霧の暗さるが如

一砥石山より地藏坂を下りて佛濱を通り長崎ふいさる

長崎が鼻 東西の限り西の長崎ふ對しての名ありと云此所ハ

捕場ふて漁家あまゝ建あらびはくろそぬ岩木を庭の姿と

大なる岩のおもろき形してあゝりの小嶋ハ岸うつ浪ふを

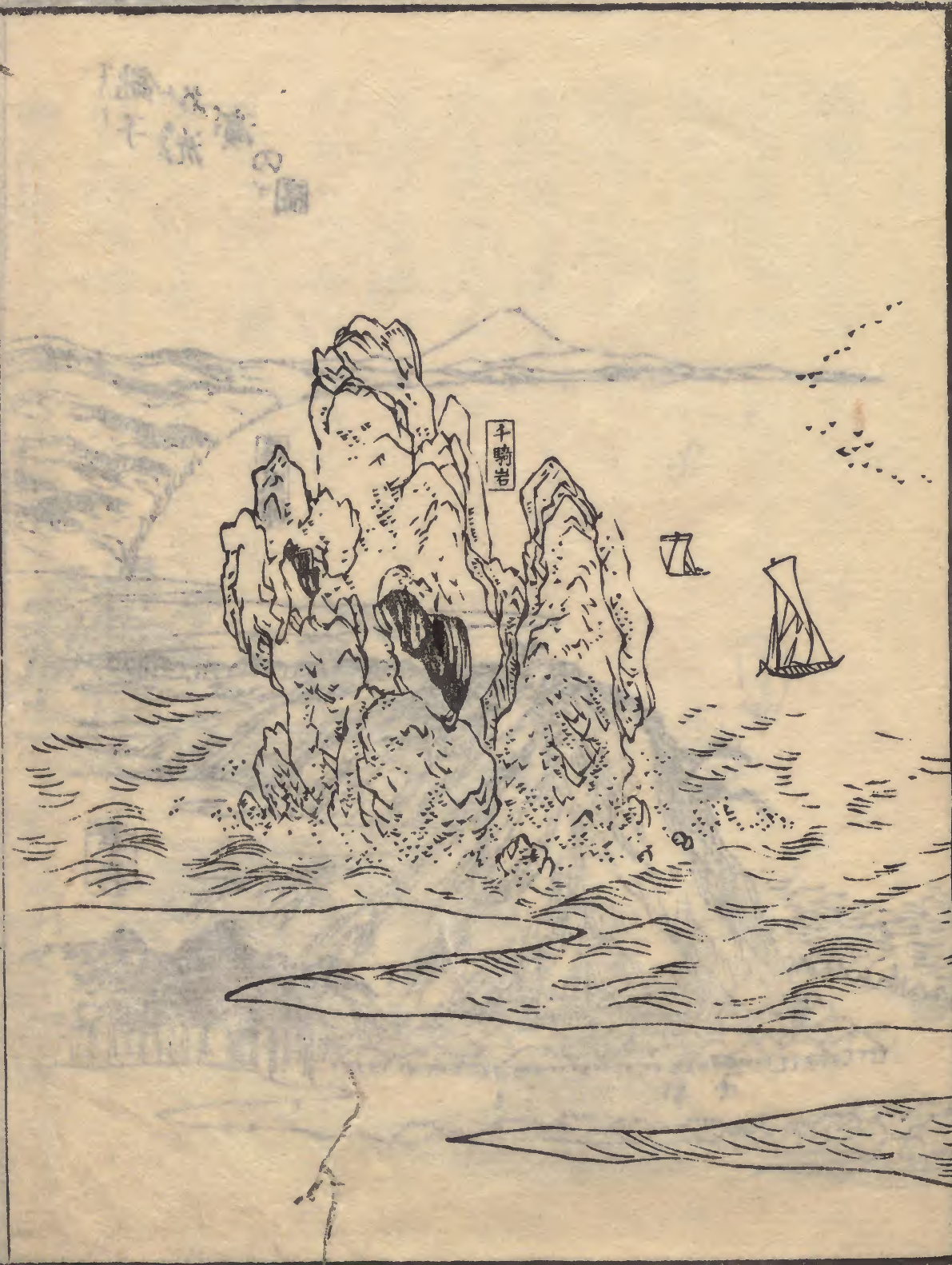
かこをかゝく風景言葉ふはくく難ハ是より疊磯と云ふ出づ

黒き岩墨を志はくろそが如く沖の方ふハ鯨岩といふがあり海

上ハ鯨の浮び出さるがおとろを過て外川ハ至る

外川の濱 此所むろハ家数千軒有ハ獵場あるを今より七八

十年前津浪ふて家を流され亡失しとろ志が今ハまゝ家数



千騎岩

鉦子浦
 大若嶋
 千騎岩
 之圖

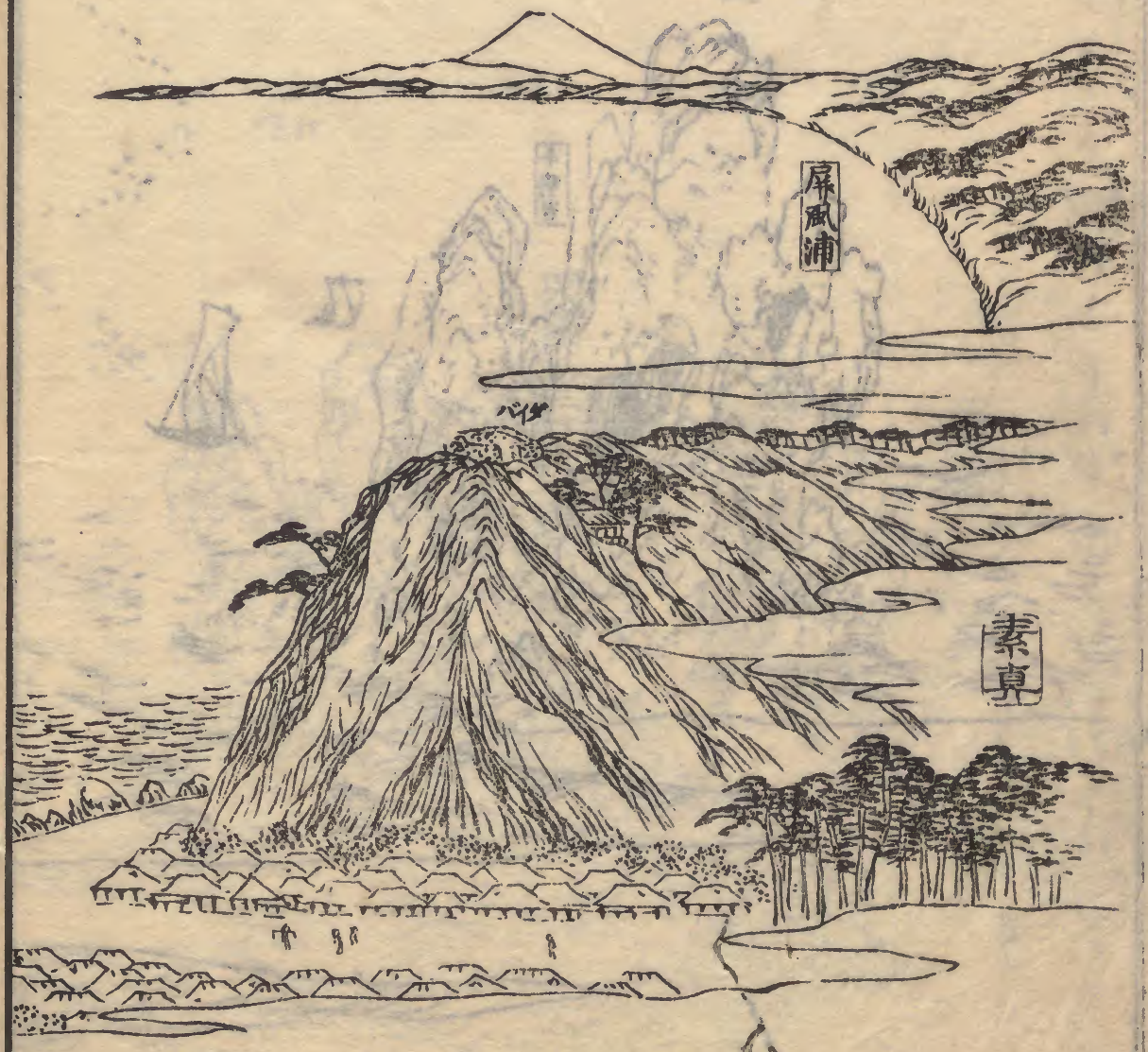


大若

素真



銚子
名洗
濱の
圖



屏風浦

素真

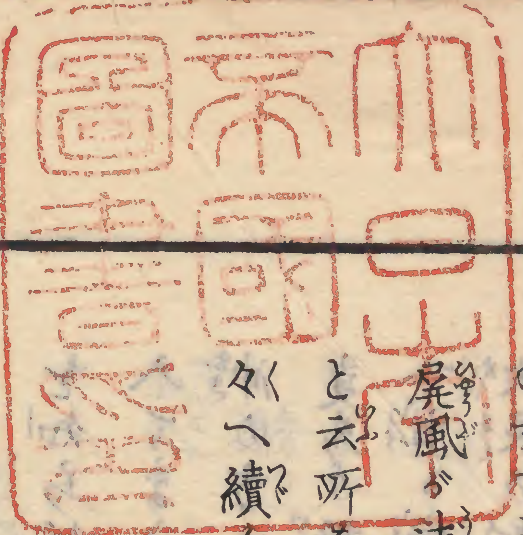
多く出来て大獵場とあきり南の方へ海に向ひて鉄炮の臺場
あり是を外川の
里人の云くより五六里許西の方へ東の庄といふ村あり三

十三が村の鎮守ありて應神権現を祭り祭禮ハ廿一年めの
四月八日外川の墨岩の上へ神輿御濱下りあり見物の老若群
集夥一云傳むる一外川の宮三夫と云もの老母との濱邊へ
てうつろ船へて流されたる赤子を拾ひ老母の急もどふてと
り揚來り養育せしとありいりある故ふて此子を後へ應神
権現と祭りしとぞ其例ありて祭り毎へ歸輿の節今ふかの
宮三夫の家へ立寄御小休あり其時此家の老母神酒などを奉
じて饗應し志をらくして老母ふるき箱より急もどを取り
御輿の上へかぶせてゆり動りしあがらサおろおんどのを丸
ちやきくといふ夫より御輿を上げて歸輿へ及ぶとある

仙ガ岩屋

外川より南の方岸より一丁許離れて海中おたてり
周圍二百間許り高さ四五丈も有べし汐干する時の歩み渡
らるされど常へ天狗住より云る故渡る者稀あり予ハ其
を知らばして渡り岩屋へ入り嶋の半覆ふ岩屋あり是より
入てまこと一丈餘も下る中の廣くして横堅二三丈も有るべし
沖の方へぬけ穴あり此所ハ大浪打かりて物凌ましく出る
夏あり難し又中程より左の方へぬけ穴あり是をぬけを高さ所
へ出る岩角へ取はき辛くして頂へ登る小海中の嶋山四方より
大浪の打くる小山も崩るうと思われ身の戦慄して目開
りきぬ程あり此山黒石ありて岩角あらく足いこめて容易ハ一
歩も進まざる山あり

大若 仙ガ岩の南へあり岸より續きたる一ツの嶋あり魚とる者
の長ありとして頂へたゞ下棟清くめづらうあるさまも作あり



住寂たる別世界誠ふ藝の世此外とおもはる是より磯丸の

山を越して名洗ふいづる
名洗浦 南面海に向ひたる獵場あり左の方へ高神明神の山續
き外川の方あり右の山上に鉄炮の臺場あり此山はさき西南

の方へ二里許海中に差いで浪打ぎわの巖壁の如くその所を
巖風が浦といふ富士の高峯遠く見へ渡り向の出先の長井
と云所あるよし夫より飯岡浦九十九里濱より上總安房の浦
々へ續く銚子磯をぐりといえるの此所にて終る

利根川圖志卷之六終

嘉永五年壬子新刻

大坂

心齋橋通北久太郎町
同 博勞町
同 筋本町角
河内屋喜兵衛
河内屋茂兵衛
河内屋藤兵衛

江戸

日本橋通二丁目
同 二丁目
同
同 芝神明前
本石町十軒店
大傳馬町二丁目
横山町三丁目
浅草茅町二丁目
筋違御門外旅籠町丁目
須原屋茂兵衛
山城屋佐兵衛
小 林新兵衛
岡田屋嘉七
英 大 助
丁子屋平兵衛
和泉屋金右衛門
須原屋伊八
紙屋徳八

